The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国語重複語の語構成論的研究
Author(s)	蜂矢, 真郷
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40272
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 11 】

氏　　名	蜂（はち）　矢（や）　真（まさ）　郷（と）
博士の専攻分野の名称	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	第　12756　号
学位授与年月日	平成 8 年 12 月 6 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	**国語重複語の語構成論的研究**
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 前田 富祺 (副査) 教 授 伊井 春樹　教 授 後藤 昭雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は，国語の，いわゆる畳語を含む重複語について，上代および中古の用例を中心に，必要に応じては中世以降の用例をも合わせて，語構成論的に研究するものである。六篇からなり（第二篇～第四篇は合わせて十七章からなる)，400字詰めに換算して約960枚の分量である。

第一篇「語構成と重複語」は，本論文の序論に当たる。国語の語構成についての本格的な研究としては，阪倉篤義氏『語構成の研究』をその嚆矢とすると言えるが，それをはじめ，有坂秀世氏，川端善明氏，および，山田孝雄氏らの従来の研究を踏まえて，それらとの関係について述べ，また，語構成の研究における重複語の研究の位置づけについても述べる。

第二篇「重複素と重複語」，第三篇「形状言の重複と重複語の諸形態」，第四篇「形状言・名詞・動詞の重複」は，本論文の中心をなすものである。

第二篇は，第一章「形状言の重複」，第二章「名詞の重複」，第三章～第六章「動詞の重複」(一)～(四) からなる。第二篇では，形状言の重複，名詞の重複，動詞の重複のように，重複語を重複素別に分類して，それらからなる全体の構造を示す。まず，形状言の重複は，基本的に情態副詞（重複情態副詞）として用いられ，「情態」を表す。名詞の重複は「枚挙」と「総数」とを表し，動詞の重複は「反復」と「継続」とを表すが，名詞の重複の表すところを「モノの複数」ととらえ，動詞の重複の表すところを「コトの複数」ととらえる。そして，「枚挙」と「反復」と，「総数」と「継続」とがそれぞれ対応し，かつ，「情態」につながることについて述べ，形状言の重複を比喩的ながら「サマの複数」と呼んで，三者を「複数」という観点から統一的にとらえようとする（第一章～第三章)。また，動詞の重複には終止形の重複と連用形の重複とがあり，連用修飾的位置に用いられる場合に前者から後者への変遷が見えるが，動詞＋ツツから動詞＋ナガラへの変遷との類似について，および，助詞ツツの語源についても述べる(第三章)。さらに，動詞の重複についてのやや特殊な問題として，漢文訓読特有の語法とされるミチミテリ・ミチミチタリ等の訓と漢語「充満」との対応について述べ（第四章)，複合動詞の終止形の重複の例の存否に関して今昔物語集の表記の考察から述べ（第五章)，軍記物語に複合動詞の連用形の重複の例の多いこととその文体との関係について述べる（第六章)。

第三篇は，第一章・第二章「縮重複と一部重複」(一)・(二)，第三章「重複接尾」，第四章・第五章「(全部) 重複」(一)・(二)，第六章「(全部) 重複・縮重複・一部重複・重複接尾」からなる。第三篇では，特に形状言の重複のものについて，いわゆる畳語の範囲に入るものと入りにくいものとを，それらの形態の差に見える後項重複素などの独立度について考察することによって，連続的にとらえようとする。まず，いわゆる畳語の範囲に入りにくいもののうち，従来，ともにとらえられたイヨヨなどとユララなどとを，前者の重複素頭音節がア行を基本とし，後者の重複素末音節がラ行を基本とするという形態的特徴にも注意して，イヨイヨの縮約ととらえられる縮重複とユラユラの縮約ととらえにくい一部重複とに区別し，上代では，縮重複の条件を持つ場合に（全部）重複することは基本的になく，一部重複の条件を持つ場合に（全部）重複することはあるなどの差違について述べ，また，両者ともに，重複の前項と後項とが全くの対等ではないことによる形態であることについて述べる（第一章・第二章)。また，一音節の語基の重複が接尾辞ラなどを伴ったものを「重複接尾」と呼び，それらの例が，ニ・トを伴いあるいは伴わないで用いられる情態副詞(1)，接尾辞カを伴いさらにニを伴って用いられる同(2)，そのままの形で用いられる名詞(1)，名詞を伴って複合名詞として用いられる同(2)，動詞化接尾辞クなどを伴って用いられる動詞(1)，動詞を伴って複合動詞として用いられる同(2)，の三種六類に分けてとらえられることを示し（第三章)，さらに（全部）重複についても縮重複・一部重複についても，三種六類に分けてとらえられることが基本的に同様であることについて述べる(第四章・第六章)。そして，(全部）重複の動詞(1)について，動詞化接尾辞クなどを伴うもの（非メク型）と，同メクを伴うもの（メク型）とについて述べる（第四章・第五章)。その上で，二音節の語基をAB，(全部）重複をABab，縮重複をAB(a)b，一部重複をABb，重複接尾をAaCと表すと，重複ないし接尾における後項の独立度をABab＞AB(a)b＞ABb＞AaCのように図式化して示すことができ，後項重複素と接尾辞ラなどとの連続性が見えることについて述べる（第六章)。

第四篇は，第一章「重複形容詞」，第二章「重複情態副詞と重複形容動詞」，第三章「重複サ変動詞」，第四章「重複情態副詞＋スと準重複サ変動詞」，第五章「重複副詞（時空数量)」からなる。第四篇では，形状言の重複，名詞の重複，動詞の重複のいずれもが見えるものを中心に，第二篇・第三篇にとり挙げなかったもの，あるいは，とり挙げたものと異なるものについて述べる。第二篇にとり挙げたものと異なり，形状言の重複，名詞の重複，動詞連用形の重複のいずれもが見えるものは，動詞連用形の重複のもののみの重複サ変動詞を別にして，名詞の重複や動詞の重複のものも「モノの複数」・「コトの複数」を表さない。まず，重複して形容詞化接尾辞シを伴う重複形容詞(1)，および，同じく形容詞を伴い複合形容詞として用いられる同(2)と，重複してニを伴う重複情態副詞がさらにアリを伴って縮約したところのナリを伴う重複形容動詞とについて，重複形容詞(1)は重複形容動詞に対して副詞の重複のものを持つなどの点で異なり構成力の強いことについて述べ（第一章・第二章)，重複形容詞(1)と同(2)との相補的関係についても述べる（第一章)。また，動詞連用形の重複がサ変動詞スを伴う複合動詞である重複サ変動詞（これは，形状言の重複や名詞の重複のものを持たない）と，形状言の重複や名詞の重複のものも見えるところの，～シタ・～シテイル等の形で用いられる準重複サ変動詞ないしトを伴う重複情態副詞＋サ変動詞スのものとについて，前者が「反復」を表すことに，後者が「情態」を表すことに傾向することについて述べる（第三章・第四章)。そして，重複したものが時間・空間・数量を表す副詞として用いられる重複副詞（時空数量）は，重複情態副詞と同様に動詞終止形の重複のものをも持つが，重複素が時間・空間・数量的意味を持つ点で重複情態副詞と異なることについて述べる（第五章)。

このように，第二篇は，形状言の重複，名詞の重複，動詞の重複という重複素別に分類することから考察し，第三篇は，形状言の重複について，(全部）重複・縮重複・一部重複・重複接尾という形態と，情態副詞(1)・同(2)，名詞(1)・同(2)，動詞(1)・同(2)の三種六類に分けてとらえられることとの両面から考察し，第四篇は，形状言の重複，名詞の重複，動詞の重複のいずれもが見えるものを中心に，また，重複して接尾辞・動詞・形容詞等を伴うものを中心に，重複形容詞(1)・同(2)，重複形容動詞，重複サ変動詞，準重複サ変動詞，重複副詞（時空数量）などとして用いられるものについて考察していて，合わせて本論文の中心をなすものである。

第五篇「交替的重複語」，第六篇「重複と接尾」は，第二篇～第四篇の研究からの展開および今後の展開の方向について述べる。

第五篇では，チラホラのように交替的に重複する情態副詞を，音節交替型・母音交替型に分類・整理し，時代とと

もにパータンの増加するさまを明らかにし，後項頭音節がクのものの多いところからブツクサなど接尾辞クサを伴うものをその延長上にとらえることができることについて述べて，交替的重複語という重複語に隣接するものへの展開を示す。

第六篇では，二音節語基が接尾辞ラなどを伴うものが，情態副詞(1)・(2)，名詞(1)・(2)，動詞(1)・(2)の三種六類に用いられ，これをABCと表すと，第三篇第六章に見たことと合わせてABab＞AB(a)b＞ABb＞AaC・ABCのように示すことができ，重複語と接尾辞ラなどを伴う派生語とを連続的にとらえることができる，つまり，重複することと接尾辞ラなどを伴うこととを連続的にとらえることができることについて述べて，重複語を含む複合語と接尾辞を伴う派生語とを統一的にとらえる視点を示す。

以上のように，本論文では，国語の語構成についての従来の研究を踏まえて，重複語についてその全体的構造を語構成論的に考察し，さらに，そこからの展開を示したものと言える。

論文審査の結果の要旨

国語の語構成の研究は，それ以前に山田孝雄氏の語の運用論などがあるが，本格的には阪倉篤義氏『語構成の研究』(1966)に始まると言ってよい。その後，現代語については，斎藤倫明氏『現代日本語の語構成論的研究』(1992)などがあるが，古代語を対象とするものは，基本的に文法研究書である川端善明氏『活用の研究』I・II (1978-9)の一部や山口佳紀氏『古代日本語文法成立の研究』(1985)の一部にそれに当たるところが見られるが，語構成の研究としてまとまったものはない。本論文は，そうした研究史において，阪倉氏の研究を継承するものと言える。

また，本論文は，有坂秀世氏の被覆形―露出形の研究や川端氏の活用の研究を基にして，語構成要素の末尾がア列・ウ列・オ列（甲類・乙類）のものを準独立的と，同じくイ列（甲類・乙類）・エ列（乙類）のものを独立的と見て，これを一つの指標として，準独立的な形状言の重複，独立的な名詞・動詞の重複という分類を行い，以下も，形状言の重複，名詞の重複，動詞の重複を基本としている。こうしたとらえ方は，従来の研究を踏まえつつも，新しい観点となっている。

さらに，重複語を同一構成要素の重複という最も単純な構成の複合語としてとらえ，重複語の研究の一つの出発点とするとらえ方にも注意しておきたい。いわゆる畳語は，擬音語・擬態語として用いられるものがかなりあり，その面から考察されることはしばしばあるが，語構成の点から詳しく考察されることはほぼなかったと言ってよい。

その点に関連して，同一構成要素の重複と言う場合に，その前項と後項とは対等であるとする通説と異なり，そのようにとらえないで，森重敏氏『日本文法通論』(1959)を参照して，前項が主，後項が従で，全くの対等ととらえない点が，とりわけ注意されるところである。後項に脱落のある縮重複や後項が一部であると見られる一部重複の形態がこの非対等性から説かれるのは説得力を持っており，また，この非対等性についての記述は，重複の後項と接尾の後項（接尾辞）とを連続したものととらえ，重複と接尾との連続性を説くことにつながっている。

そして，本論文の大きい特徴は，全体的視野からの統一的把握を試みるところにあると言える。

第一に，いわゆる畳語の範囲に入るもののみならず，縮重複・一部重複といった形態の上でやや異なるものや，下に接尾辞，名詞，動詞，形容詞などを伴ったものを，重複語として統一的にとらえようとする。

第二に，名詞の重複を表す「枚挙」・「総数」，動詞の重複を表す「反復」・「継続」，形状言の重複を表す「情態」について，「枚挙」と「反復」との対応および「総数」と「継続」との対応（つまり，名詞の重複と動詞の重複との対応）の上にそれらが「情態」につながることを示して，「モノの複数」「コトの複数」「サマの複数」として「複数」という統一的視点から総体的にとらえようとする。

第三に，(全部)重複，縮重複，一部重複，重複接尾，接尾を，重複ないし接尾における後項の独立度について連続的なものとしてとらえようとする。特に，このとらえ方は，重複語を含む複合語と接尾辞を伴う派生語とを統一的にとらえようとする視点を持つものとして注意されるところである。

このように，全体的視野からの統一的把握を試みる一方で，従来必ずしも区別されていない縮重複と一部重複とを区別するなど，細分化してとらえようとする方向をも合わせ持っている。しかも，細分化したその視点が全体的把握につながるところに，この論のおもしろさがあると言えよう。

用例は，上代・中古のものを中心としているが，多くの文献から例を挙げており，必要によっては中世あるいは近世以降のものを多く挙げることもあり，動詞連用形の重複などは非常に多くの例を表示していて，恣意的ではなく客観的な記述を心がけていると見られる。その他，助詞ツツの語源とか，接尾辞クサを交替的重複語の延長上にとらえるとか，あるいは，漢文訓読特有の語法や，今昔物語集の表記や，軍記物語の文体との関係といった面にも注意を払い，国語学的なあらゆる面に配慮しようとしているところが見受けられる。

もっとも，本論文にも問題点がないではない。

第二篇第一章・第二章や，第四篇第五章は，上代の例に対して，中古の例についての記述がやや乏しく，他の章と比べて幾分不均衡なところがあると言えようし，他にも，用例の挙げ方に不均衡なところがないとはいえない。また，第四篇第四章は，近年，特に現代語において研究の進んでいるアスペクトについての諸論考を参照する方がよいかと見られる。

しかしながら，これらの問題点は本論文全体の価値を損うものではない。用例の挙げ方の不均衡は，一つの論点を徹底して追究しようとした結果とも見ることができよう。本論文は，古代語におけるいわゆる畳語を含む重複語の全体的構造を，語構成の点から総体的にかつ統一的に明らかにしようとしたものとして，価値のあるものと認められ，学位に値するものと考えられる。

本委員会は，本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであると認定する。